

東京バッハ合唱団 月報

[第 690 号] 2019 年 12 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 690

December 2019

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

『平家物語』を読み直しつつ

旧年を送り、新年を迎える呼びかけ

大村 恵美子 (主宰者)

途中から「令和元年」と変えられた今年は、「平家物語」という古典を、原文と意識を並べ、挿絵や写真も添えて読みやすくしたものが、発行されました(一万年堂出版、全3巻)。一昨年に、新版としてあらためて刊行された文庫版・全訳注(講談社学術文庫、全4巻)も同時期に目に入ったので、どんなものかと思って、両方を読み比べて見ました。

年号は、世界中で、それぞれの国にしか通用しないものにこだわると、換算が複雑で、混乱するので、辛うじて世界共通といえる(西暦)を用います。

その西暦1167年に、太政大臣という最高のポストを得た平清盛から始まって、一見、華やかに見える平家一門が、わずか18年後に、壇の浦の海底に沈んでゆくまでを書いたのが「平家物語」です。平家がみな滅び去って、戦乱が終り、やっと一息ついた頃、1185年7月9日に、京都付近に激しい大地震が起り、皇居も数多くの大寺院もことごとく崩壊、またもや民心を恐怖につき落としました。

さらに、平家滅亡に一躍ヒーローとなって功績を上げた源義経は、名声を一人占めにする半面、平家に代わって天下を制することになった、実兄の源頼朝の憎しみを買い、殺害すべしとの院宣を受けてしまいます。南へ北へと逃げ廻った末、ついに討伐され、当の鎌倉幕府の頼朝も、1199年には、自らも命を落としてしまいます。

沙羅双樹の花の色

盛者必衰のことわりをあらわす

たけき者も遂にはほろびぬ

偏に風の前の塵に同じ

まことにはかなく、あわただしい、12世紀後半の物語です。

その間に、平家に近寄って、息子の高倉天皇の後宮に清盛の娘(建礼門院)を迎えて皇子を産ませ、のちの安徳天皇とさせながら、その幼児をわずか8歳で、平氏の侍の軍勢と共に、壇の浦に沈めてしまうという大それた成りゆきを作った後白河法皇も、1192年、68歳で逝去。侍の軍勢と運命を共に分かつことになった、神がかりの天孫の存在が、この「平家物語」をつらつら読み返して、改めて摩訶不思議なものに見えてくる

のです。奇しくも、令和の新天皇位の継承の諸儀式が、現実の世界でも同時進行していました。

それにしても日本史上、源、平、足利、その他代々の幕府で、政権を担って来た強力なつもの達のうちの誰ひとり、天皇の命を奪い去るという者は現れず、122代の明治天皇まで辿ってきて、ついに現代世界に、れっきとした王存続の文明国家として、諸大国に伍してゆく、この珍しいわが国を、私たちは、今後どうすればよいのか。個々の自分と同じただの平民が、一段上の大統領(国家元首)となるのは面白くない、だから長い間代々引きつがれて来た天皇家を、何とかしてトップに据え続けられれば、満足、安心、気が咎めないで済むのでは……。これは、一体どんな心理学的なコンプレックスのなせるわざなのでしょう。

どう転んでも、人間というもの、たよりないのです。賢人政治を理想といっても、その規準を測れるものがあるのでもなし。多数決の民主主義もすでに危うし。マンモス闊歩の時代も過ぎ、人間の優勢も傾き、ゴキブリの支配とかの未来が始まるのか。なんとも考えられませんが、今の私に気づくのは、生命存続のための良し悪しを知って、他者にも分かちあえるのが人類だけだとするのなら、それが出来るのに、怠惰のせいで地球環境自体が没落してしまうのを見る前に、各自のエゴイズムを脱却するよう、どうせ、どうせ、と逃げないで、冷静な判断に、「しっかりと」(安倍政権の口グセ)立ち帰るしかない、という決意です。世界中のどんな片隅にも、生命・身体の危険に喘ぐ人を放置しない、それこそ本当のグローバリズムによって、辛うじて人類の将来が期待されるのではないのでしょうか。

日本だけが「美しい」という、おのろけのような自画自賛を排して、老いも若きも、身をもって全人類・全生物の救出に、自らのすべてを動かして生きましよう。これが私の、旧年を送り、新年を迎える呼びかけの言葉なのです。

月報 12 月号 CONTENTS

- ・日本エキュメニカル協会「講演と音楽の集い」に参加して(田所 功)、カテドラルにバッハが響いた日(相良聖美子) …p.2,3
- ・新年(2020年)の演奏計画 / 聖霊降臨祭カンタータと3曲のコーラル・カンタータ(大村恵美子) ……………p.3-4

日本エキュメニカル協会「講演と音楽の集い」に参加して

田所 功 (団員：テノール)

私は東京バツハ合唱団に入団して2年になりますが、バツハの曲は教会で演奏したり歌ったりするのがいいなと思っています。その理由は後ほど説明します。入団してすぐの頃から、一度は東京カテドラル聖マリア大聖堂で歌ってみたいなと思っていましたので、この度のエキュメニカル集いの会場となった、この聖堂で歌えたことは、その夢を叶えることになりました。

モテット第4番 BWV 228。練習の時に、左隣のバス声部の白井さんに引き込まれそうになったので、本番は注意して、自分の音程を保って何とか最初の部分を乗り越えました。後半は、とにかく大村先生の指揮を見ながら、リズムを崩さないよう注意して歌いきりました。歌い始める前に2時間以上座りっぱなしで突然歌い出したので、声がよく出るかどうか心配でしたが、思った以上に高音もよく声が出ました。でも、前で歌っているアルトの人には「何？ 今の音！」と思われていたかもしれませんね。

カンタータ 28 番第2曲の合唱 BWV 28/2。この曲はテノールから歌い出しますので、大村先生の手が動き始めるところを見つめて、うまくスタートしました。その後もテノールが単独で歌い出すところがあるので、その部分は十分注意して、全体をとおして右隣の奈良さんとリズムを合わせて無事終了しました。

カノン「平和をわれらに Dona nobis pacem」。すでに3曲目なので調子が乗ってきて、声もよく出ているので、逆に調子に乗りすぎて音譜よりも高い音程で歌ってしまい大失敗。でも、全3曲とも楽しく歌うことができ感謝です。

カトリックの観点での原稿を依頼されたのですが、この2年間プロテスタントの教会で行われる練習に参加して、プロテスタント教会で歌われていたバツハのカンタータを歌っても、私自身まったく違和感はなかったです。バツハの曲を好きで歌うのに、プロテスタントもカトリックもないと思います。たまたま私は、中学校から大学までカトリック校だったので、大学3年生の時に洗礼を授かりましたが、キリスト教の山にカトリックのルートで登っただけのことだと思っています。将来何かの機会に、《ロ短調ミサ曲》を歌いながらミサができたかなという夢はありますが。

私は、バツハの曲を歌う時、いつも祈っています。練習に通って来るときも祈りに来ています。「祈りとは神様との対話です」と言われていますが、歌いながら神様と対話をしているのです。そうすると、「田所さん、こうなさい、これはこうですよ」と、聖霊が話しかけてくれるのです。だから、やっぱりバツハの曲を歌うのは教会がいいです。

終了報告 (客演)

日本エキュメニカル協会 創立 50 周年記念
第 3 回 講演と音楽の集い
「聖なる教会」— 霊の多様な賜物による一致 —

日時：2019 年 11 月 4 日 (月/休)、午後 2 時～5 時
会場：東京カテドラル聖マリア大聖堂

[挨拶] 松山與志雄 (日本エキュメニカル協会理事長)
[祝辞] 岡田武夫 (カトリック名誉大司教)、コンスタンチノ・コンニ・カランバ (オリエンズ宗教研究所長)
[講演] 藤井清邦 (日本キリスト教団聖ヶ丘教会牧師)、新垣任敏 (カトリック聖歌作曲家)、申 鉉錫 (八街グレイス教会牧師)
[オルガン演奏] 松居直美 (オルガニスト)、吉本真理 (国際基督教団代々木教会牧師)
[合唱演奏] 東京バツハ合唱団

<東京バツハ合唱団 演奏>

曲目：(日本語演奏、大村恵美子訳詞)
・バツハ、モテット「怖るな 我なれと共にあり」BWV228
・バツハ、合唱「主を頌めまつれ」(カンタータ第 28 番《頌むべきかな 年終り》より) BWV28/2
・カノン「平和をわれらに Dona nobis pacem」(作曲者不詳、松尾茂春編曲)
・みんなで歌いましょう (上記カノン)
合唱：東京バツハ合唱団、オルガン：田尻明葉
指揮：大村恵美子

主催：日本エキュメニカル協会
来場人数：約 300 名



カテドラルにバッハの歌が響いた日 ——しかも、私たちの母語で

相良 聖美子 (団員：アルト)
(ひみこ)

福島 [南相馬、2015/8/22] で歌わせていただいたから、なにかお役に立つかしらと始めた歌の旅。今年は東京カテドラルで歌わせていただきました。12月には少し小さい2つの教会で、昨年に引き続き今年も歌わせていただきます。

バッハのカンタータやモテットは、教会の典礼のために作られた曲なので、聖堂で歌われるのが本来の姿だと思います。神の御手に抱かれて歌っているようで、私は聖堂で歌うのが好きです。今回は隣にいるソプラノの声が天から降るように聞こえました。まさに天使の歌声です。

しかしこの聖堂は、反響が大きすぎて沢山の音が重なるとうるさく感じたのではないのでしょうか？ バッハの聖堂 (ライプツィヒ聖トーマス教会) ではどう響いたのでしょうか。この日の聴衆の方々には、12月の2つの聖堂 (荻窪教会と三崎町教会) でも、また来年に予定されている音楽専用ホールでも、私たちの合唱を聴いていただきたいと思います。

私たちの合唱団は、聖堂で歌う機会と音楽ホールで歌う機会を持っています。とても幸せです。団員の努力の成果です。神に感謝。

新年(2020年)の演奏計画

■特別演奏会 (詳細準備中)

<曲目> …… (右段より、演目の紹介)

カンタータ第113番《イエス 高き宝》

Herr Jesu Christ, du höchstes Gut BWV 113

カンタータ第93番《ただ主に依り頼み》

Wer nur den lieben Gott läßt walten BWV 93

カンタータ第78番《イエス わが心を》

Jesu, der du meine Seele BWV 78

カンタータ第184番《待ち望みたる 喜びの光》

Erwünschtes Freudenlicht BWV 184

<日時/会場>

1) 野尻湖合宿とコンサートツアー

- ・8/6 (木) 野尻湖・神山教会 (NBA 国際村)、午後4時
- ・8/7 (金) 軽井沢追分教会、午後2時30分 (予定)
- ・8/8 (土) 小布施・おぶせミュージアム、午後2時

2) 都内と近郊の皆様に向けては、上記コンサートツアーの前後に、教会を会場にしての演奏会を企画中。

■第119回定期演奏会

<曲目>

カンタータ第110番《喜び 笑い あふれ》

Unser Mund sei voll Lachens BWV 110

《クリスマス・オラトリオ》前半3部 (完全版)

Weihnachts-Oratorium Teile I-III BWV 248 I-III

<日時/会場>

- ・12月の土曜午後、都内/近郊音楽ホール (年内に決定)

※上記の公演に参加する新規団員を募集しています。

※新年の練習開始：2020年1/6 (月)、1/11 (土) より。

聖霊降臨祭カンタータと 3曲のコラール・カンタータ

—新年(2020年)前半の演目—

大村 恵美子 (主宰者)

たびたびお伝えしたとおり [月報 2019年5月号「聖霊降臨祭 (ペンテコステ) とは何か」(小海基)、同「バッハの音楽日記：1724年。そして、私たちの2020年」(大村恵美子)、など]、新しく迎える年には、バッハがライプツィヒ聖トーマス教会の音楽監督(カントル)に着任して第2年目(1724年)、生涯で最多数のカンタータを作曲した年の作品中から、代表的な下記の4曲をとり出して演奏することといたします。

作曲初演日の順に並べてみますと：

- ・BWV 184 《待ち望みたる 喜びの光》

……1724年 5月30日 (聖霊降臨節第3祝日)

- ・BWV 93 《ただ主に依り頼み》

……同年 7月9日 (三位一体節後第5日曜日)

- ・BWV 113 《イエス 高き宝》

……同年 8月20日 (三位一体節後第11日曜日)

- ・BWV 78 《イエス わが心を》

……同年 9月10日 (三位一体節後第14日曜日)

と、かなり接近した日曜日のための作品だったことが分かります。

ご存じのようにキリスト教の教会暦は、冬の初め、心の準備をしてキリストの降誕を待つ「待降節」の第1日曜日を起点とします (今年は12月1日)。ところが、ライプツィヒ時代当初のバッハのカンタータ制作サイクルは、着任の時期の事情で、「三位一体節」後第1日曜日 (1723年の場合、5月30日) が起点になり、翌年の同節日の前で終了することとなりました。ほぼ半年のずれがあるわけです [月報 2018年4月号、5月号に詳説。第116回定期演奏会プログラムに再録]。

こうした事実を前提にして、上記4曲の初演日の教会暦に注目してみましょう。BWV 184の「聖霊降臨節」第3祝日というのは、クリスマス、イースターなど大きな祭日を3日連続 (日月火) で祝う、というバッハ当時の慣例での3日目に当たります。その次の週「三位一体節」の作品をもって、バッハの最初のサイクル (=第1年巻) は一旦閉じられたのです。

つづく3曲はすべて、1724年の「三位一体節」後第1日曜日 (1724年の場合、6月11日) を起点とする第2年目のサイクル (=第2年巻) の前半に置かれていますが、この「第2年巻」こそは、カンタータ制作者バッハが、その1年間の勤務 (ほぼ60回ほどの演奏機会) をとおして「コラール・カンタータ」の様式の完成を追求しようと企図した「コラール・カンタータ年巻」となるはずのものでした。すなわち、今回取り上げたBWV 113 (基本コラール：バルトロメウス・リングヴァルト「イエス 高き宝」、BWV 93 (基本コラール：

ゲオルク・ノイマルク「ただ主に依り頼み」、BWV 78 (基本コラール: ヨーハン・リスト「イエス わが心を」) は、いずれも当時に愛唱されたコラールを作品の骨格に据えて、多様な実験を試みた成果です。因みに、コラール名とカンタータの題名が一致するのは、歌い出しを曲名とする慣例のもとで、それぞれの冒頭合唱が各コラールの第1節の歌詞で歌われるからです。

演奏効果を考えた結果、私たちの1つのコンサートとしては、この順序を変えて、BWV 113《イエス 高き宝》、BWV 93《ただ主に依り頼み》、この2つのコラール・カンタータを、まず第1ステージに、そして休憩後には、おそらく多くの聴衆の方がご存知で、期待して来られると思われる、同じくコラール・カンタータ BWV 78《イエス わが心を》を登場させ、フィナーレとしては、聖霊降臨祭のお祝いムードに溢れた BWV 184《待ち望みたる 喜びの光》を配して、歓喜の大合唱で、このコンサートをしめくくる、ということにしました。

- ・ BWV 113 《イエス 高き宝》 (コラール・カンタータ)
- ・ BWV 93 《ただ主に依り頼み》 (コラール・カンタータ)
- ・ BWV 78 《イエス わが心を》 (コラール・カンタータ)
- ・ BWV 184 《待ち望みたる 喜びの光》

ここでは、来年の演奏の順にしたがって、解説を進めようと思います。

1. カンタータ第113番《イエス 高き宝》

Herr Jesu Christ, du höchstes Gut BWV 113

[初演]1724年8月20日(三位一体節後第11日曜日)

[福音書]ルカ18:9-14(パリサイ人と取税人)

[歌詞]リングヴァルト「イエス 高き宝」(1588)(整理番号【52】*)を基本コラールとするコラール・カンタータ。1)2)4)8)原詞のまま、3)5)6)7)原詞書き換え。*)大村恵美子編著『バッハ コラール・ハンドブック』整理番号(以下【52】と略す)。

[編成]独唱 SATB、合唱、fl、ob、oba2、弦、通奏低音(計25分)

1)コラール合唱「イエス 高き宝」……コラール第1節。日本ではあまり知られないコラール(混声4部合唱)だが、身心ともに深い痛みに喘ぐ、3/4拍子、ロ短調の曲。オーボエ・ダモーレ2本の付点音符、弦の16分音符、ともにジリジリとした暗さを表現する。信仰を誇るパリサイ人でなく、胸を打って懺悔する取税人に共鳴。4分。

2)アリア(アルト)「憐みたまえや かかるわが重荷」……コラール第2節。4/4。ヴァイオリン斉奏のみと、アルトの憐みを乞う祈り。5分。

3)アリア(バス)「悪しき思い起こり われさまよう」……コラール第3節・変形。12/8。シチリアーノ風リズムのオーボエ・ダモーレ2本(イ長調)だが、バスの歌詞は、主の慰めが自分の心の破れを救う、と望みを託し、器楽がいたわりでそれを癒してくれる。3分。

4)コラール・レチタティーヴォ(バス)「医(いや)しのみ言葉 甘き歌もて」……コラール第4節の間に、悩み多い現状吐露が挟まれる。2分。

5)アリア(テノール)「イエス 受け入れたもう」……コラール第5節・変形。華やかな動きの多いフルートが、長い前奏・間奏・後奏でテノールを柔らかく包み、カンタータ全体の転換点を印象づける。5分。

6)レチタティーヴォ(テノール)……5)アリアに引き続き、テノールは「主 受け入れたもう」と明言し、それを聞いて「われ みもとに歩み寄る 低き心もて」と答える、長い応答の歌。2分。

7)二重唱(ソプラノ/アルト)「ああ わが主 赦したまえ」……幼な児のように素直にみ恵みに答えて生かしたまえ、ときっぱり歌う。2分。

8)最終コラール「み霊もて強め み傷もて癒し」……信仰にまとめられた声楽・器楽全員の祈り。1分。

2. カンタータ第93番《ただ主に依り頼み》

Wer nur den lieben Gott läßt walten BWV 93

[初演]1724年7月9日(三位一体節後第5日曜日)

[福音書]ルカ5:11(ペトロの大漁)

[歌詞]ノイマルク「ただ主に依り頼み」(1657)【142】を基本コラールとするコラール・カンタータ。1)4)7)原詞、2)3)5)6)原詞書き換え。

[編成]独唱 SATB、合唱、ob2、弦、通奏低音(計18分)

1)コラール合唱「ただ主に依り頼み」……コラール第1節。大規模な構造。整った器楽の前・間・後奏に支えられて、合唱は、2声部のスタートに混声4部のコラール1フレーズずつが導かれ、間奏で区切られながら、6フレーズのあとに後奏。12/8、ハ短調。このコラールは、世界中でも有名でよく歌われるが、J.S. バッハも4曲のカンタータその他にも、愛用している。喜びにつけ、悲しみにつけ、神に全き信頼を寄せて、堂々と歌い祈る。5分。

2)コラール・レチタティーヴォ(バス)「憂い われに甲斐なく」……コラール第2節の間に心情をこまかく吐露する叙唱。2分。

3)アリア(テノール)「十字架の時 至らば」……コラール第3節・変形。3/8、変ホ長調。おちついた覚悟に始まる。最後には「み神は 子らの悩みすべてを ついに救い出したもう」と明るい希望に終える。3分。

4)二重唱(S/A、弦によるコラール旋律)「み神は知りたもう」……コラール第4節・変形。4/4、ハ短調。信仰に対し、神は愛の賜物を与えたもう。2分。

5)コラール・レチタティーヴォ(テノール)「空 荒れ狂い 猛り」……コラール第5節・変形。コラールのフレーズの間に挟まれた叙唱は、緩急とりまぜて、世の移り変わりを描写し、ペトロの大漁の例を引用しながら、雨のち晴れ、すべてに終わりあり、と希望に導く。2分。

6)アリア(ソプラノ)「主を仰ぎ 望み」……4/4、ト短調。歌詞をコラール旋律と撚り合わせながら、神への信頼・服従を、殊勝な決意で歌いあげる。2分。

7)最終コラール「主に歌い 祈りて」……コラール第7節。神への信頼を、全員で、満ち足りて歌いおさめる。1分。

<つづく>